

# チャペル空間論

—その実際と分析：関西学院大学を事例として—

平林孝裕／中道基夫／Andreas Rusterholz  
／打樋啓史／Christian M. Hermansen  
／舟木 讓／辻 学

## 1. はじめに

日本における近代化の歩みのなかで、キリスト教が教育・医療・福祉の領域で重要な働きをしてきたことがつとに指摘される。それはとりわけ教育の領域ではっきり認識することができる<sup>1</sup>。キリスト教の教育にたいするこのような貢献は、どの地域においても同様であるというわけではない。関西圏、京阪神におけるキリスト教による教育機関の重要性は相対的に高いと思われる<sup>2</sup>。

1 たとえば、附論アンケート調査の（表1）を参照。

2 日本におけるキリスト教は、主として都市部を中心に発展してきたこともあり、上記のような事情は地方部より都市部にあてはまるものと思われる。しかしそれは都市と地方による偏倚ばかりとは思われない。ここで述べたように東西という地域的偏倚も重要な要因である。東京圏にくらべてこれを主張する際に、どのような統計もしくは資料にもとづいて立証するかは難しい問題である。すなわち、学校数といった数量の事柄でなく、その地域での伝統の深さ、認知度、社会的評価といった簡単に数値化できない要因から判断されなければならないからである。さしあたり、このようなキリスト教主義学校、またはいわゆる「ミッション・スクール」の日本近代化に果たした役割を問う包括的な研究はあまりに大きな課題であり、将来の研究にゆだねなければならないだろう。ここでは、あくまでも参考として、大学を設置している法人数（私立大学学校同盟加盟110法人に限る。<http://www.shidairen.or.jp/>を参照）からその設置数だけを見る。キリスト教関係学校は、東京・神奈川で49法人の24.5%（12法人）であるのに対して、京都・大阪・兵庫では21法人の42.9%（9法人）を占める（ちなみに愛知では3法人のうち1法人〔33.3%〕である）。また、興味深いエピソードとして、宗教を背景にもつ学校法人が多い京都でもキリスト教主義学校（ミッション・スクール）は好意的な評価を受けて

さてこのように、関西圏において、キリスト教関係学校が教育分野で枢要な位置を占めるにしても、重要なことはこれら学校がキリスト教の理念や精神にもとづいた教育を実現していることでなければならない。そのような場として、キリスト教関係の学校では、初・中等教育では宗教科・聖書科、大学ではキリスト教系の教養科目がカリキュラムに設置され、また教科外に、礼拝や「チャペルアワー」などの名称の時間がおかれ、キリスト教関係学校の教育を特徴的なものしているわけである。なかでも、経験的なことがらであろうが、礼拝やチャペルアワーの時間は、そこに学ぶ児童・生徒・学生にキリスト教学校に独特な印象を与える重要な活動となっていると考えられる。

この理解が妥当だとすれば、関西圏における重要な文化的要素としてキリスト教関係学校における特有の文化である礼拝・チャペルの時間を考察してゆくことが許されると判断される。本来であれば、このようなキリスト教関係学校における礼拝（・チャペル）文化の全般的な研究がなされるべきだろうが、この特徴がどのような影響をあたえているかは、寡聞ながらこれまでほとんど扱われてこなかった主題でもあり、その測定がきわめて困難である。したがって、当面それは将来の課題とされなければならない。しかしながら、とりわけ礼拝・チャペルを実施するために、キリスト教関係学校は、この目的のため特別の施設をしばしば設けており、それがこれら学校の特徴ともなっている。これらは具体的で、調査の対象としやすいものであり、これら学校が教育にキリスト教を体現している様子を検討するうえでまず適切な対象であるとみなすことができるだろう。その意味で、本研究は上記のようなキリスト教関係学校の社会的意味、またとりわけ京阪神を中心とした関西圏におけるキリスト教関係学校の文化への影響という問題を視野に入れながら、その準備的研究として、チャペルという施設、とりわけそれを建築空間として捉えて、そのキリスト教文化的側面を明らかにしようとするものである<sup>3</sup>。

いるという。佐藤八寿子『ミッション・スクール あこがれの園』（中央公論新社、2006年）、iii頁を参照。

3 このようなチャペル空間をめぐる研究もこれまで主題とされてこなかった領域であるので、これらを検討するための指標はあらためて設定されなければならない。これに



本稿では、関西学院大学上ヶ原キャンパスを事例にとりあげ、このような研究の可能性を拓く試みとする。このような研究は、未開拓な分野であり、またここの学校での事情（教派、キリスト教主義の位置づけなど）が異なるため、その特有の要因を考えつつ丁寧に研究をすすめることが求められるからである。関西学院大学は、1889年に神戸原田の森に開設されて以来、1929年に今日の西宮市・上ヶ原に移転し、1932年に大学令による大学となり、また戦後も新制大学として阪神間におけるキリスト教主義の教育機関として社会的に評価されてきた。関西学院憲法に明記されているように、一貫して「キリスト教に基づく青年教育」がその根幹にある。これを反映して、関西学院大学ではキャンパス内に複数のチャペルが設置され、活発なキリスト教活動が展開されている。その意味で関西学院大学は、特徴的なキリスト教関係学校であると言え、事例としてふさわしいと考えることができる。なかでも長らく関西学院大学の伝統的な校地として時を重ねてきた上ヶ原キャンパスを対象として取り上げることとする。

以下、キャンパス全体の概況、各チャペル空間の考察をくわえる。さらに附論として、上記でのべた関西圏におけるキリスト教主義学校の位置づけ、およびチャペル空間についてのアンケート調査について報告する。

## 2. 上ヶ原キャンパスにおけるチャペル空間

関西学院大学<sup>4</sup>は、現在、主に三箇所のキャンパスからなっている。西宮上ヶ原キャンパス（西宮市）、神戸三田キャンパス（1995年開設。三田市）、大阪梅田キャンパス（K. G. ハブスクエアとして2000年開設。大阪市北区）<sup>5</sup>で

---

ついで試みは、この研究に関連して以下で発表している。平林孝裕『《出会い》の空間論——チャペル空間論序説——』『キリスト教と文化研究』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター）第8号、2007年3月、113-132頁。

4 関西学院大学の基本的情報については、関西学院辞典編集委員会編『関西学院事典』（学校法人関西学院、2001年）を参照されたい。また2001年以降の情報はホームページ（<http://www.kwansei.ac.jp>）をあわせて参照していただきたい。

5 上ヶ原キャンパスには、神学部・文学部・社会学部・法学部・経済学部・商学部が

ある。1929年に神戸原田の森より移転してから、関西学院大学の伝統を担ってきた。

現在、上ヶ原キャンパスには、新設の人間福祉学部をふくめて7つの学部が置かれている。各学部それぞれチャペルアワーのための施設（以下、チャペル）が置かれている。また、礼拝堂としてランバス記念礼拝堂がキャンパス内に建てられて、大学にとどまらず関西学院全体のキリスト教行事に供用されている<sup>6</sup>。したがって現在、上ヶ原キャンパスには8箇所のチャペル（専用の礼拝堂1、学部設置チャペル7）が設置されていることになる<sup>7</sup>。本稿では、人間福祉学部チャペルは新設であるので考察の外とし、これ以外の7つのチャペル空間について報告を行う。試論である「《出会い》の空間論」<sup>8</sup>におおよそ準拠しながら、1) その概観、2) 空間構成、3) シンボル、4) 調光という観点から論じ、それぞれの5) 特徴を明らかにすることとした。

### 3. 各チャペルの分析

#### 【A. ランバス記念礼拝堂】

##### 1) 序

ランバス記念礼拝堂は、関西学院の上ヶ原キャンパスの正面近くに位置し、

---

置かれている。2001年には上ヶ原から神戸三田キャンパスに理学部（2002年、理工学部名称変更）に移転したが、2008年あらたに人間福祉学部が設置された。神戸三田キャンパスには総合政策学部があり、現在は理工学部が移転している。大阪梅田キャンパスは主に社会に開かれた大学院教育、各種講座に用いられている。また2007年から東京丸の内キャンパスが開設され、各種講座・講演に用いられている。

6 またキャンパス内の講堂もキリスト教行事にしばしばもちいられる。講堂はキリスト教行事にとどまらず、講演会などの多人数を対象とした行事に用いられる場所として設置された建築物であるので本稿の対象とはしない。また、大学院でも上ヶ原キャンパス大学院棟、大阪梅田キャンパスでもチャペルアワーがもたれているが、これも本稿の対象とはしない。

7 ちなみに、キャンパス外となるが上ヶ原キャンパスに隣接して建てられた関西学院会館には、ベーツチャペルが設置されている。また神戸三田キャンパスには、総合政策・理工各学部のチャペル、ランバス記念礼拝堂（同一名称）の三箇所が置かれている。

8 前掲「《出会い》の空間論」を参照（注3を見よ）。

関西学院のシンボリックな建物の一つである（写真 1）。1959 年、関西学院創立 70 周年を記念して建てられたものであり、スパニッシュ・ミッション・スタイルによる建築様式は関西学院全体の建造物と調和したものである。ランバス記念礼拝堂は当時の学生の保護者の寄付によって建てられ、また内部に設置されたパイプオルガンは関西学院の元宣教師たちの募金活動によって購入されたものであり（老朽化のために 1982 年に買い換え）、関西学院を愛する人々の思いが集約された礼拝堂である。

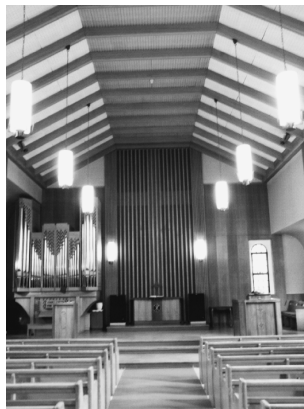
## 2) 空間構成

礼拝堂の天井は高く、聖壇正面には格子壁の中に天井から床まで薄く十字架が浮かび上がっている。

聖壇は神学部のチャペルと同様に一段高いところに説教壇と聖書壇とが左右に配置されている。聖壇の正面奥には祭壇があり、その上に十字架が置かれている。その向かって右側に聖歌隊席（約 16 名）があり、左側にパイプオルガンが設置されている。かつては、「恵みの座」によって会衆席と聖壇は区切られていた（恵みの座については、【B. 神学部】2) 空間構成 [9 頁] を参照）。



（写真 1）



（写真 2）

会衆席は 2 列に長いですが並べられており、約 120 人が座るスペースがあり、

全員が正面の聖壇に向かって座るように並べられている。

礼拝堂に入って一番目を引くのが正面の床から天井までの十字架であろう。説教壇も存在感はあるが、それよりも広くとられた聖壇とその奥の十字架そして、縦に伸びたパイプを持つパイプオルガンという正面聖壇の空間が、ランバス記念礼拝堂の中心であるといえる。正面の聖壇の壁はパイプオルガンのパイプと合わせて、縦のラインが強調されており、会衆席から上（天）に向かう方向性が感じられる（写真2）。この礼拝堂が、大学の各学部の講話を中心としたチャペルとは違って、より宗教的な空間の中で大学の儀式を行うことを意識されて造られていることが伺える。

実際、ランバス記念礼拝堂は、院長・学長就任式、新任教職員就任式などの学院の様々な儀式を始めとし、学生のクラブの結団式や卒業生の結婚式などの儀礼的行事にも使われている。

かつて聖壇と会衆席を区切っていた恵みの座の柵は2006年の春に撤去され、聖壇がより広く使えるようになり、会衆席の一体感が若干強められた。関西学院を創立したメソヂスト教会の伝統である恵みの座が取られるということは残念な一面もあるが、ランバス記念礼拝堂では聖餐式を行うことがほとんどなく、むしろ礼拝学的には現代は聖壇と会衆席の一体化が進められており、関西学院の行事やコンサートを行う礼拝堂としては一つの発展的な姿であるといえる。

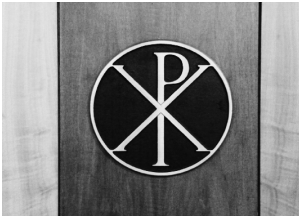
### 3) シンボル

ランバス記念礼拝堂には、様々なキリスト教のシンボルを見いだすことが出来る。正面の十字架はもちろんのこと、祭壇の装飾であるギリシャ文字のX（キー）とP（ロー）はキリストを表すモノグラムである（写真3）。

そのほかにも説教壇と聖書壇の装飾は三つの輪が重ね合わさったようなものであり、キリスト教の教理である三位一体を象徴するものである（写真4）。

正面玄関の上部の壁にはイエスの母マリアを象徴するバラ窓がある（写真5）。またこの形を「義の太陽」を思わせるものとしてキリストの象徴であ

るという理解もある。いずれにせよ本格的なゴシック建築の教会に見られるバラ窓と比較すると単なる建築上のデザインに過ぎないという感は拭えないが、キリスト教のシンボルに基づいた意匠である。



(写真3)



(写真4)



(写真5)

そのバラ窓の上、正面の屋根の上にはいわゆるケルト十字架といわれる十字架と太陽のシンボルである円が組み合わされた十字架が立てられている（写真5）。

このような様々なキリスト教シンボルに飾られたランバス記念礼拝堂そのものが関西学院においてキリスト教のシンボリック存在であり、上ヶ原キャンパスの時計台と並んで、卒業生にとって母校に帰ってきたというイメージを与える存在となっている。

#### 4) 調光

ランバス記念礼拝堂には比較的多くの窓があり、その窓の薄い黄色のガラスを通して入ってくる光は、柔らかでかつ静かな空間を創りだしている。どちらかというと昼間の集会に使われる礼拝堂であり、外の活気あふれるキャンパスから切り離された静かで、穏やかな場を提供している。

## 5) 総括・評価

ランバス記念礼拝堂は、関西学院のキリスト教を象徴する存在であり、これからも大切にされるべき礼拝堂である。多くの人たちの母校愛によって建てられた礼拝堂であり、その思いによって関西学院に通う人々の心象風景の一つとなっている。その外観は保ちつつも、内部のシンボルを現代的なものへと発展させ、現代におけるキリスト教の意味を発信する課題を担っていると思われる。

## 【B. 神学部】

### 1) 序

関西学院は、1929年にその創立の地神戸の原田の森から現在の西宮の上ヶ原に移転した。現在の神学部校舎はその時に建てられたものであり、2階の神学部礼拝堂（チャペル）はそれ以来80年間使われている。その神学部チャペルは、関西学院のチャペルの中でも、最も教会、特にメソヂストの伝統を持つ教会の礼拝堂に近いものであろう。

また、伝道者養成を主たる目的とする神学部において、チャペルはその実践教育の場、また学生の霊性育成の場として、他の学部のチャペルとその構造や役割も若干異なっている。関西学院のチャペルアワーの時間帯だけではなく、礼拝実習・説教実習の現場としても用いられている。

### 2) 空間構成

神学部チャペルは、聖壇と会衆席が明確に分離し、聖壇と会衆席が相対峙する構造である。チャペルに入って最も目を引くのが、一段高くなった聖壇である。19世紀のヨーロッパにおいて、教会の礼拝堂は共同体の集まる場所という考えから、個々人が宗教的感情を得る場所であるという礼拝観に変わったため、礼拝堂の構造は、お互いが顔を合わすことよりも、聖壇や説教に集中しやすいようないわゆる教室型の構造になった。神学部のチャペルもその構造の影響を受けている（写真6）。



(写真 6)



(写真 7)

チャペルの最後部から中央通路は聖壇へと続いており、最後部に立つならば、聖壇の奥にある祭壇、左右の説教壇と聖書壇に視線が引きつけられる。この聖壇は会衆席から3段の階段を上ったところに位置し、聖壇と会衆席を「恵みの座」と呼ばれる柵で区切ることによって、聖壇の存在がよりいっそう強調されている（写真7）。聖餐卓は聖壇奥に退いた形で配置せられ、聖書壇よりも大きく作られた説教壇がこのチャペルの中心が何であるのかを象徴的に表している。

聖壇と会衆席の間にある柵はそもそも祭壇を守るものであったが、メソヂスト教会において聖餐式の際に陪餐者が跪いてパンと葡萄酒を受け取るための場所として用いられるようになった。その場所がヘブライ人への手紙4章16節の「大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」という言葉に基づいて「恵みの座」と名付けられた。

この恵みの座があるのは、現在は関西学院の中では神学部チャペルだけである。神学部だけが唯一聖餐式を行っており、神学部が日本メソヂスト教会の伝道者養成機関の伝統につながっている象徴であるといえる。

礼拝の中心となる説教壇は、宗教祭儀を行う一般の教会とは違う大学のチャペルとして説教を中心とする性格を反映したものであり、それに対峙するよう

に並べられた会衆席は、チャペル出席相互の交わりよりも説教を聞くことに重点が置かれた配置となっている。

### 3) シンボル

神学部のチャペルでは、上述した礼拝堂の構造そのものが最もシンボリックな存在ではあるが、その他にもいくつかのシンボルがチャペルの中には用いられている。

まず、聖壇奥に十字架、そしてその左右にろうソクが置かれている（写真8）。十字架はイエス・キリストの十字架と復活というキリスト教のメッセージの根本を表すものであり、光は神の創造の業、救いを表し（創世記 1:3）、イエス・キリストのシンボルであり（ヨハネ 9:5、Ⅰヨハネ 2:9）、聖霊のシンボル（使徒 2:3）、キリスト者の生き方を表すものである（ヨハネ 12:36）。

説教壇と聖書壇には教会暦の典礼色に従った典礼布が掛けられ、それぞれの時期にふさわしい典礼的な意味を伝えている（写真9）。

こうした視覚的なシンボルは、キリスト教理解を助ける役割を持ち、キリスト教文化や芸術の入り口としても重要な役割を担っている。



（写真8）



（写真9）

### 4) 調光

現在の神学部のチャペルの窓には、少し黄色味があったガラスが入れられて



おり、電気の照明よりも外からの光の存在が強調されている。黄色味がかったガラスを通して入ってくる外からの光は、チャペルに落ち着いた雰囲気を作りだし、説教に集中し、自己に向かい合う助けをしている。

## 5) 総括・評価

神学部のチャペルは 19 世紀の教会建築の構造を取り入れた伝統的なものであり、いわゆる礼拝堂らしい礼拝堂であるといえる。落ち着いた雰囲気の中で行われるチャペルでは、一人一人が個々に内省し、説教に集中し、宗教的経験をする場としてはふさわしいものである。

しかしながら、近年の礼拝に関する意識変革に伴い、礼拝が個々人の宗教体験の場ではなく、共同体の共通経験の場であることが強調され、礼拝も会衆が互いに顔と顔を合わせるような礼拝堂の構造が見直されつつある。説教中心主義を象徴する大きく一段高く作られた説教壇よりも、交わりを象徴する聖餐卓が礼拝堂の中心に置かれる傾向にある。

神学部のチャペルにおいても、交わりを重んじる内容のチャペルがなされることもある。現在のチャペルの伝統的な構造は価値あるものであるが、新しい礼拝論に基づいたチャペルを行うためには、不自由さを感じることは否めない。

かつてのように、言葉によってキリスト教を経験するのではなく、音楽を通して、また共に歌ったり、共に体験したりすることによってキリスト教を経験するためには、今後、神学部チャペルの構造をどのように発展させるかが課題である。

## 【C. 文学部】

### 1) 序

文学部の校舎は、1929 年に高等学部文学部校舎として建築された。スパニッシュ・ミッション・スタイルで、鉄筋コンクリート造りの 2 階建てであり、現在、文学部専用校舎として用いられている。文学部校舎（文学部本館）一階に

ある第一教室はチャペルとしても使われているが、もともと授業と式典が行われる講堂として造られた。今でもチャペルアワーのない時には、教室あるいは説明会の会場等に使われており、少人数の入学試験の場合は控室になる。文学部本館の同じ一階には、もう一つ造りの似た教室（第4教室）があり、さらに二階にある第5教室も似たような造りだが、舞台がない。それらはチャペルアワーを行うためには使われていない。

## 2) 空間構成

外から：チャペルは文学部本館の一番広い教室である。正面入り口から文学部に入ると、玄関と通路はアルファベットのTの縦棒が短く、横棒が長い構造だと分かる。短い縦棒に当たるところには、部屋のドアがなく、左の壁には各階の案内図（文学部校舎案内図）、そして右には掲示板（文学部臨時掲示板）がある。横棒の通路まで進めば、右の端の方に、半地下にある第一教室が見える。キャンパスの地面は平らではなく、校舎の一階の床は外のグラウンドよりやや高めである。階段を6段下りてドアの前に立つ。チャペルの入り口横にある《今週のチャペル》案内のホワイトボードを見て、初めてそこがチャペルだと気づく。文学部の他の部屋と同じように、突き出た小さい看板がドアの上にあるが、そこには「第一教室」としか記されていないからだ（写真10）。



（写真10）



（写真11）

週3回（火・木・金）のチャペルアワーの際には、建物に入って突き当りの

所に、当日の奨励者名と肩書きが記されており、第一教室のドアの左の扉に、手作りの小さい板が掲げられ、ローマ字で《CHAPEL》と書かれている。幅の広い入り口の両扉の上部には、釣鐘の形をした琥珀色の凹凸ガラスがあるので、西洋的な印象を与えるが、それでもチャペル（礼拝堂）の入り口だとは分かりづらい。入り口の左側、教室の前方には幅の狭い引き戸があり、車椅子での出入りも可能である。

内部：チャペル（講堂）は、前方の舞台と固定された 20 列の机とその前に付いた跳ね上げ式座面からなる。机の上板も座席も余り幅がないので、座ると窮屈である。第 1 列目から第 7 列目までは同じ高さで、第 8 列目からは 1 段ずつ上がり、全部で 14 段の階段教室である。真ん中には通路があり、両側に 6 人ずつ座れる。但し、扉のある入り口は 7 列目にあり、前方から見て右側の 7 列目の机とベンチは取り除かれ、そこに中央の通路につながるスペースがある。車椅子のために前方の 9 席が取り除かれているので、収容可能人数は 225 人である（写真 11）。

舞台は 55 センチ位の高さで、前の両側には壁から 80 センチ離れたところに四角い柱があり、壁と柱の間は 4 段の階段になっている。柱の最上部は天井からの仕切りと一緒に、柱頭はイオニア式で、仕切りの方にも波状の装飾とロゼットがある（写真 12）。両柱の間の仕切りの下には八角星の模様が付いている。舞台の壁には黒板が設置してあり、式典の際それを隠すために、えんじ色のカーテンが付いている。さらに舞台の中心には可動式教壇があり、両側には背凭れの高い椅子が 1 脚ずつある。舞台の右側には、教壇に向かって電子オルガンがあり、さらにピアノもオルガンに面して置いてある。舞台の左側には、音声設備とリードオルガンがある。天井には照明の他、様々な給水や暖房の管が目立つ。窓は後方の南南東向きの壁と、舞台から見て左側の西南西向きの壁にあるのだが、段差があるので、後ろの方へ行くに従って次第に小さくなる。窓台の高さまでの壁は板張りで、色はこげ茶色、机の色も同様である。

最後に、チャペルに入ってから右側の壁に書棚が設置されており、聖書と讃美歌が置いてある。



(写真 12)



(写真 13)

### 3) シンボル

チャペル（講堂）には、前に言及した柱の装飾以外、シンボルと呼べるものがない。柱の部分は明らかに日本風ではないので、異文化の匂いはするが、宗教性は不明瞭である。普段は教室なので、聖句も飾らないことになっている。

しかし、チャペルアワーが行われる時は、教壇にキルトを掛けて、讃美歌番号の掲示板も立てる。教壇から垂れるキルト（垂れ布）には十字架が縫われていて、それが唯一宗教的なシンボルである。その十字架は、薄緑の幅の広い枠の中にある紫の縦長の四角の中に、緑と黄色の三角と四角でかたち作られている。一風変わった十字架だが、全体としては自然に見える（写真 13）。教壇の側には花を活けてもらっているが、それは単に飾りである。そして、クリスマス前の降誕節の間、ロウソク 4 本のあるクランツを置く。

### 4) 調光

照明は教室用である上に、かなり古く、明るさを調整することができないが、チャペルアワーが行われる 10 時 35 分から 11 時 05 分までの間、太陽の光が入り込むので、全体として明るい雰囲気である。曇りの時はそれほど明るくないのは言うまでもない（写真 11 参照）。

## 5) 総括・評価

チャペルは文学部本館の人通りの多い場所にある。第一教室は、礼拝堂ではないにも拘らず、場所的にも空間的にも、チャペルアワーを行うには一番相応しい教室である。出席する学生は、チャペルに入って教学補佐と教務補佐の二人から、聖書及び賛美歌のプリントとチャペル週報を受け取り、席に向かう。自分で授業のプリントを取って席に向かうのとは異なる雰囲気ではあるが、教室はあくまで教室である。しかし、教会の礼拝堂を知らない学生にとって、教壇の垂れ布とオルガン演奏は、チャペルのしるしになるだろう。チャペルアワーの時の雰囲気は、授業とは微妙に違うので、私語もあまり聞かれない。

牧師をしていた時、老人ホームや公園や墓地など、様々な場所で礼拝を行い、一番困ったのは讃美歌の伴奏だったが、このチャペルは設備も整っているので安心である。ただし、年に2回（春学期の最後のチャペルアワーとクリスマスの前のチャペルアワーの時）のチャペルパーティーを行う際は、空間的な制約を痛感する。参加者は、机と座席が固定されているので自由に移動できない。本当の交わりや《出会いの空間》になりにくい。チャペルは《神の言葉と出会う場》ではあるが、本来それは個人としてではなく、共同体として、つまり《他者との出会い》の枠において起こらねばならない。その意味において空間的な制約はあるが、大学カリキュラムの中であって、神の言葉を聞き知ることのできる空間の存在意義は、非常に大きいのではないだろうか。

## 【D. 社会学部】

### 1) 序

1960年4月、本学文学部から独立して社会学部が創設された当初、専用新校舎が未完成であったため授業や事務は大学本館内で行なわれ、チャペルアワーは商学部チャペルを借りて行なわれた。同年9月に社会学部本館が落成してから専用チャペルの使用が始まった。社会学部本館は、スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一された上ヶ原キャンパスの他の学部の校舎とは趣を異にする、どちらかと言えば近代的なデザインの建物として建築され、館内に

500 人規模の大教室 2 室が設置された。このうち 2 階に位置する「2 号教室」は同時にチャペルとして用いるために設計されたもので、今日に至るまで社会学部のチャペルアワーはこの「大教室兼用チャペル」で行なわれてきた。上ヶ原キャンパスにおける他の各学部には 100～200 人規模のチャペル専用の部屋が設置されている。文学部の場合チャペルは教室兼用となっているが、広すぎず、意匠の面でもチャペルとしての使用を優先させたものである。この点で、500 人収容の講義用大教室をチャペルと兼用してきた社会学部の事情は、本学上ヶ原キャンパスにおいて特殊なものであると言えよう。

## 2) 空間構成

上述のとおり、ここで紹介する空間はチャペルアワーにはチャペルとして、講義時には大教室として用いられるという二重の顔をもつ。その意味で、これは学部のキリスト教プログラムや個人の静想のためだけに聖別された空間ではなく、あくまでチャペルアワーに機能を果たす空間として設計され使用されている。しかしもちろん、チャペルとして用いるがゆえに通常の大教室に比べると重厚で落ち着きのある造りになっており、壁、机、椅子、窓枠の色彩、照明などに工夫や装飾がなされている。天井も十分に高く、これもチャペルにふさわしい。

講義時には正面の壁が黒板になっているが（写真 14-1）、チャペルアワーにはこれを左右にスライドさせるとその後ろが舞台（壇）となっている。かなり広い壇であり、向かって左側奥にヤマハの電子オルガン、正面中央に説教台が置かれている。後方には重厚な仕様の椅子が数脚並べられている（写真 14-2）。部屋全体の形状はほぼ正方形で、会衆席の座席には大教室用の長机に折りたたみ式の椅子が並んで付いたものが使われている。後方に行くほど席が高い位置になるように全体にゆるやかなスロープがつけられている。講義の場合、教員はチャペル用の壇の下にある講義卓で話すが、チャペルでの講話担当者は壇上の説教台で話すので、会衆席から見ると随分遠くにいるように感じられる。しかし、壇上からは会衆席全体がよく見渡せる（写真 15）。

出入口は前方に二箇所、後方に一箇所あり、この内前の一つと後ろとを入口（受付）として用いており、そこで出席者に当日の配布物を配る。通常は閉じている前方入口付近に車椅子用のリフトが設置されている。この他にチャペル壇上に直接上がるための通用口があり、関係者はここから出入りする。つまり、この部屋で授業が行なわれている時にも、通用口から入れば黒板の背後にあるチャペル壇上に上がって作業ができるわけである。



(写真 14-1)



(写真 14-2)



(写真 15)

### 3) シンボル

筆者が1999年に宗教主事として就任した際、社会学部チャペルで視覚的シンボルはほとんど用いられていなかった。筆者は、大教室と兼用であるがゆえにチャペルとしての雰囲気欠けるこの部屋にこそ、視覚に訴える適切なキリ

スト教シンボルを置くことがふさわしいのではないかと考えた。これは、チャペルを健全な意味での「非日常的空間」として強調し、少なくともチャペルアワーにはその営みのために聖別された空間として位置づけるために有益であり、また学生たちへの教育的効果も期待できるからである。そのような意向を学部のカリキュラム教育委員会に伝えたところ賛同を得て、段階的にいくつかのシンボルの導入を行ってきた。

まず大きなものとしては、壇の正面奥に布製の大きなバナーを掛けることになった。柴田みどり氏の作品から図案が取られたこのバナーは、社会学部宣教師（現院長）のルース・M・グルーベル（Ruth M. Grubel）教授がフィリピン・マニラ市にある「ドール・センター」に注文され、当センターのスタッフの手によって作成されたものである。ドール・センターは貧しい女性たちの自立を目的とする施設であり、ここで女性たちは人形やバナーなどの注文を受け作成している。全体の背景には赤が用いられ、キリストを表す魚が描かれている。さらにその中に、キリストの生涯のいくつかの場面（降誕、洗礼、エルサレム入城）、キリストや聖霊を表すいくつかの象徴（十字架、百合、ぶどう、A〔アルファ〕とΩ〔オメガ〕、鳩、炎）が描かれている。各場面や象徴には白、黒、黄、紫、緑などの原色が効果的に使われている。このバナーは明るく鮮やかな色彩をチャペル全体に与えると同時に、聖書の物語を視覚的に伝える役割を果たし、さらにフィリピンの人々の心と手の働きを思い起こさせてくれる（写真 16）。

また説教台に掛ける典礼布（白、緑、赤、紫の4色）を購入し、季節ごとにこれを取替え、その都度キリスト教においてその色のもつ象徴的意味を学生たちに説明している。さらに、大きな復活ロウソク（イースターキャンドル）を木製のスタンドに立てたものを常時置き、毎回のチャペルアワーでこれに火を灯す。復活の命を表すロウソクの光は、チャペルをその時間には聖別された空間とするための重要なシンボルとなっている（写真 17）。その他、いけばなを飾るようになった。毎週初めに業者から切花が届けられ、担当のスタッフがこれをきれいに活けてくださる。いけばなはチャペルの空間に生命感と自然の彩りを与える貴重な存在である（写真 18）。





(写真 16)



(写真 17)



(写真 18)

以上のように壇上で用いるシンボルの他に、チャペル後方の壁には「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネ 8:32) という聖句を記した大きな書が掛けられている。酒井操氏の揮毫によるこの書は、前宗教主事の船本弘毅名誉教授が寄贈されたものである(写真 19)。このヨハネ福音書の言葉は、社会学部創設時に学部の聖句として選ばれたものであり、同じ言葉を彫った碑が学部本館入口横の壁にも埋め込まれている。チャペルアワーでは度々この学部聖句に言及され、その都度出席者たちに後方の書に目を注ぐよう促している。さらに、夭折された卒業生のご父君が寄贈されたルオーの絵画の複製 2 点が、前方の壁の左右に掛けられている。荘重な仕様の額縁に入れられたこれらの絵画は、チャペルに厳かさと暖かさを加えている(写真 20-1、20-2)。



(写真 19)



(写真 20-1)



(写真 20-2)

#### 4) 調光

調光に関しては、大教室として用いるための明るさが必要であるため、部屋の左右の壁全体の窓ガラスは一般的なものが使用され、特にステンドグラスなどは用いられていない。天井一面に設置された電灯はすべて蛍光灯である。その意味では、チャペルに望ましい一定の薄暗さや白熱灯の光の暖かさが欠けている。ただし、これを補う形で、左右および後方の壁に、チャペルらしい装飾の施された白熱灯の間接照明がそれぞれ一列に設置されている（写真 21-1、21-2）。またチャペル壇上の照明およびスポットライトには白熱灯が使用されているため、壇上が蛍光灯で照らされた会衆席とは異なる空間であるという印象を与えている。



(写真 21-1)



(写真 21-2)

## 5) 総括・評価

このような「大教室兼用チャペル」にはメリットとデメリットの両面がある。メリットとしては、広々としており出席者が多くても収容できることや、壇も広いので大人数の音楽団体も壇上でゆったりと演奏できることなどがあげられる。デメリットとしては、チャペルとしては広すぎて出席者同士が親密感や一体感を感じにくいこと、どうしても大教室としての印象が強すぎて、チャペル空間としての静けさや雰囲気欠缺してしまうこと、机と椅子が固定されているので、それ以外の形での座り方（例えば皆が輪になって座る、床に座るなど）が不可能なことなどがあるだろう。

実際のところ、筆者が宗教主事としてチャペルアワーを運営していく上で、大教室兼用チャペルであるがゆえの難しさに直面することは少なくない。大学における宣教の器としてチャペルを用いていくとき、チャペルプログラムと空間構成とは極めて密接に関わっており、どのような空間であるかによってプログラム内容は大きく決定されてくる。「チャペルアワーとは何か」をめぐって議論は種々あろう。しかし、教会ではなく学校であるからこそ、説教を中心にした形だけでない様々なプログラムを試みつつ、「出会いの場」としてのチャペルを作っていく可能性に開かれているのは確かである。その意味で、「講壇の上から語る教員の話が学生たちが聞く」という形態だけを想定して作られたこの大教室型チャペルには制約・限界がある。

今後学部本館の建替えの機会があれば、通常の出席者数に適した広さ（150～200人規模）の、静けさと暖かさと歓迎の心に満ちた象徴的空間としての、また多様なプログラムに対応できる構造のチャペルが切望される。しかし、たとえ大教室兼用であってもこのような空間が学部には与えられ、今日までチャペルアワーが守られ続けてきたこと、その中で学生たちが自分の生き方を問い、生きる上での様々な励ましや慰めを見出してきたことの意義は大きい。

## 【E. 法学部】

### 1) 序

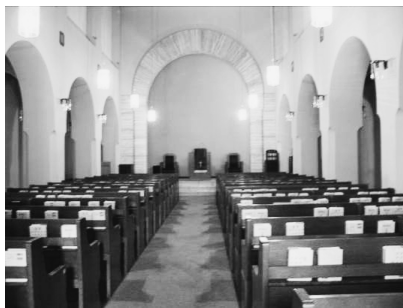
法学部チャペルは学部建物の南部にあり、東向きに入り口がついている。チャペルの建物は事務棟と法学部講義棟（A 棟）の間に東西の方向に伸び、二階建てとなっている。したがってチャペルは法学部に属する建築物の中央に配置されていると言ってよいであろう。

### 2) 空間構成

法学部チャペルの建物は概ねチャペルでの礼拝の時間だけ用いられ、それ以外の時間帯には施錠されている。正面入り口は鉄製の柵によって区切られており、風除室をぬけてチャペル正面に入るようになっている（写真 22）。これらは伝統的な教会建築の様式を模したものである。つまり会堂本体があり、それが内陣につながり、また、会堂には南北に側廊が付され、これらはローマ式のアーチを伴う 4 本の柱で会堂本体と区切られている。会堂内部には、東西方向に配列されたベンチが 15 列設置されている（写真 23）。これらのベンチは 4 人がけで、各々に礼拝用の聖書と讃美歌集が附属の棚にそなえられている。会堂本体の北側、およそ中央に空間が確保されており、この空間は北側につけられたドアに通じている。この鉄を打ち付けたドアは西側にある事務棟への通用口である。



(写真 22)



(写真 23)

会堂本体の南北にある側廊は基本的には通路であるが、必要に応じて座席がおかれることもある。会堂の南、内陣の前方に礼拝用のオルガンが設置されている。会堂本体と内陣との間には三段の階段があり、内陣が高くなっている。またローマ様式のアーチで空間的にも仕切られている。

内陣には説教壇が中央におかれ、その後方に三基の《玉座》がしつらえられている。これらは濃色の木製の同質の素材で造られている。内陣の南側には小さな階段がおかれているだけだが、北側には採光のために窓が配されて、その窓には黄色に着色されたガラスがはめ込まれている。また説教壇の背景となる西側の壁は白色でとくに装飾はなされていない。

南側廊の東端には階段があり、二階席に通じている。

### 3) シンボル

チャペルの内部に設置されている宗教的シンボルは以下の通りである。会堂本体と側廊を区切るアーチの上方にタイルが左右にそれぞれ三枚配置されている（写真 24-1、24-2）。それらには、緑と青、もしくは緑と赤のチェックの地色として白色で、1) 市松模様、2) 後足でたつ獅子、3) 両翼をひろげた鷲の文様が描かれている。これらの文様は、ヨーロッパ中世の紋章にもちいられているものであり、それらから着想されていると考えられる。



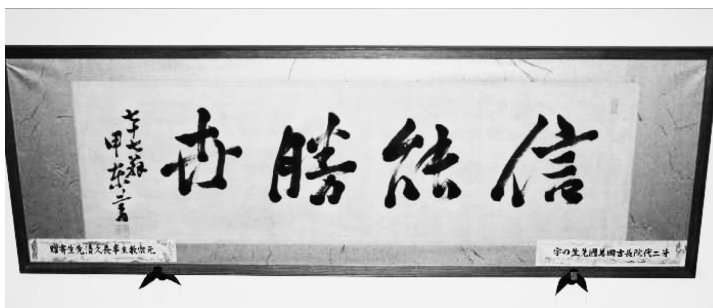
（写真 24-1）



（写真 24-2）

会堂北側の壁には一幅の書が掲げられている（写真 25）。この書は関西学院

第二代院長・吉岡美國（よしおか・よしくに）が揮毫したものであり、「信能勝世」（信ハ能ク世ニ勝ツ：Ⅰヨハネ5章4節参照：「おほよそ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。世に勝つ者は誰ぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらずや。」文語訳聖書から引用）と記されている。



（写真 25）

また現在、会堂本体に並行した廊柱にはそれぞれ羊毛製のタペストリー（横 90×縦 103 センチメートル）が掛けられている（写真 26）。これらは中国・トウチャ（土家）族の女性によって織られたものである。これらは香港の道風山基督教センターから輸入されている。タペストリーのモチーフは中国人のキリスト教画家フー・チーによりデザインされた作品である<sup>9</sup>。

内陣の中央に設置された説教壇には典礼布（金糸の十字架の刺繍がふされている）が掛けられて、教会暦に応じて適切な色調のものに交換される（写真 27）。また説教壇の両脇には燭台（50 センチメートル）が配される。燭台にそなえつけられたイースターロウソク（70 センチメートル）は白色で、イエス・キリストを意味する赤色のモノグラム：A（アルファ）と Ω（オメガ）が記され（黙示録 1 章 8 節；同 22 章 13 節を参照）、その二つの文字の間には同じく赤色の十字架が描かれている。

9 これらには、エマオの道、イエスの降誕、サマリアの女（生ける水）、最後の晩餐、善き牧者イエス、イエス波をしかる、十字架上の苦難、放蕩息子、エデンの園などが含まれている。<http://www.tfsc.org/artshop/wallprintsample.htm> を参照。



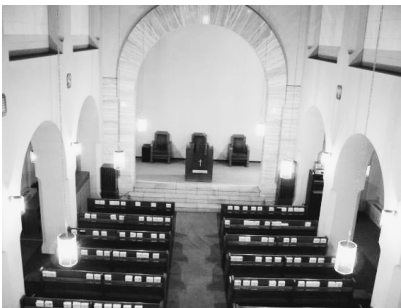
(写真 26)



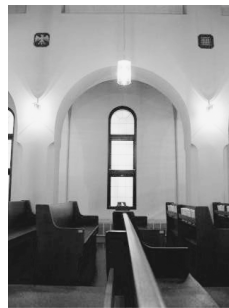
(写真 27)

#### 4) 調光

チャペル内の照明は基本的には電球による人工的なものに依存している（写真 28）。窓は少ないが、会堂本体の南側、内陣の北側に採光用の窓があり、着色ガラスがはめ込まれている（写真 29）。祭壇上のろうソクは学生団体の演奏があるとき以外に灯される。



(写真 28)



(写真 29)

#### 5) 総括・評価

建築として、チャペルは学部を中心部に配置されていると判断される。また

その形式は伝統的な西欧的の教会建築の様式に倣っている。とくにスコットランド系のピューリタンの様式に近いといえるだろう。淡色系の石壁に、濃色の木製の調度品を備えた説教と讃美のための礼拝空間である。それは純粋なプロテスタント的伝統を体感させる空間である。この空間にさらに、宗教活動担当者（学部宗教主事および宣教師）によって、ロウソクやタペストリーが備え付けられている。これらが配されることで、アジア的な雰囲気醸し出すものが付加され、しばしばプロテスタント教会にみられがちな、たんに知的な雰囲気以上のものを志向したキリスト教的なものが表現されている。それらは融合してスピリチュアルな印象をこの空間を経験する者にあたえる。それがどの程度の効果を有しているか、またどのように解釈するかは、簡単に判断することはできない。

## 【F. 経済学部】

### 1) 序

経済学部チャペルは、経済学部本館 2 階の東端に位置している。経済学部本館は 1929 年関西学院が、神戸の王子公園から現在の上ヶ原キャンパスに移設した当時の建物であり、ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による。建築当初は、チャペルの北側に隣接する形で上ヶ原キャンパスを一望できる宗教主事室が置かれ、チャペルの背後東より宗教主事室とチャペルを行き来出来る扉が付設されていた。現在その部屋は書庫として使用され、宗教主事室は 1 階西端に移設されたが、扉は残されており建築当時の名残を残している。

経済学部本館には中央芝生側（北側）に面する中央入口、東入口ならびに西に開口を有する西入口があるが、正門に最も近い東入口を入った所にある階段を上がったところにチャペルは置かれている。しかし、2 階ということもあり、場所が分かりにくいいため、階段の上り口壁にチャペル表示がなされている。また、授業期間中の月曜日から金曜日の毎日プログラムを提供していることもあり、1 週間のプログラムをチャペル横掲示板、中央入口横掲示板ならびに西入口横にある宗教関係掲示板に掲示し情報の提示と出席勧奨を行っている。従来



は、全学のチャペルプログラムが掲載されているチャペル週報と、より詳細な経済学部のための当日プログラムを掲示し、毎日張り替える方式をとっていたが、2008年度より1週間の予定を掲示することで毎日登校することのない学生諸君への案内の便宜を図ることとしている。

## 2) 空間構成

経済学部チャペルはチャペル専用室として設計されてはいるが、移転当初、経済学部本館が一時大学本館として利用され、チャペルも講堂兼用として使用されていたこともあり、現在もいわゆる礼拝堂（ランバス記念礼拝堂や神学部チャペル）としてのみ使用されるのではなく、各種オリエンテーションや、入試の際の受験生控室に使用しており、教室的な役割も果たしている（写真 30-1、30-2）。そのため、純粋な礼拝堂としての調光や雰囲気を提供することには限界がある。



(写真 30-1)



(写真 30-2)

チャペルの空間としては、講壇を有し会衆席は階段状に造られている。天井は、階下にあたる部分に若干の高さを感じることは出来るが、階上に行くほど天井との距離が近くなるため圧迫感を感じざるを得ない。ただ、低い階段三段分の高さがある講壇は、ともすれば上から高圧的に語る感じになりがちであるが、階段状であるため、語り手と中央付近の聴衆の目線が同じ程度のものとなり、全体をまんべんなく俯瞰することが出来、また、聴衆との距離も近く感じ

られるため、比較的語り易い形状となっていると言えよう。ただ、入り口からフラットな部分はわずかであるので、車椅子が入る位置が限られており、そうした配慮が今後必要であると言えよう。

入り口は、観音開きの木製扉で入室するとすぐに受付の机が左手に配置されている。そこで、出席票を兼ねたコメント用紙ならびに当日の資料を出席者が受け取り着席する。

正面（東側）に講壇が設置されその中央に説教壇が設置されている。この形式はいたって簡素であり後に述べるように従来シンボルは一切無い。これは、説教（言葉）重視の礼拝形式に基づいている<sup>10</sup>と言われ、現在も実施されるプログラムの8割は、講話中心である。講壇の上には3つの椅子が置かれ、通常は両端の椅子に司会者と講話担当者が座る（写真31）。



(写真31)



(写真32)

講壇に向かって左（南東角）にAllen社製の電子オルガンが設置されている（写真32）。奏楽者は講壇に直角に背を向ける形であるが、外部スピーカーを使用していないため、やむを得ずそうした配置をとっている。なお、司会者との連携はオルガンの上にある鏡を通して行う。

講壇に向かって右（西側）には黒板が設置されている（写真30-2参照）。礼拝堂の雰囲気としてはあまり好ましくないが、先述のようにチャペルプログラ

10 商学部チャペルの項参照。

ム以外に使用されることもあり、必要な備品となっている。通常はチャペルプログラム案内や、講話者の紹介に使用している。

黒板の背後にはオーディオ機器があり、講壇の両脇にスピーカーが設置されている。1 時限目の授業終了からチャペル開始時間までの 5 分間、現在は教会歴に相応しいキリスト教音楽を流して、チャペルプログラムへの導入としている。また、講壇後ろの西側壁面には当日歌う讃美歌と聖書朗読箇所を記す黒板が設置されている。白墨で手書き記入する形なので、整然とした形にはなりにくい。

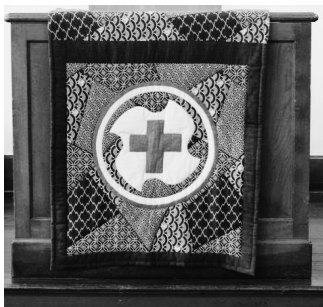
聴衆席は、少し小さめの 5 人掛けの木製長椅子が 3 列になっており、東側と中央が 13 列、西側が入り口に当たるため 10 列で 150 名前後までが収容可能人数となっている。前列 3 列までがフラットでそこから後ろが低い 1 段ごとの階段となっている。前列から 6 段目と 7 段目の間が入り口から続いているフラットな部分となる。各椅子の背面には讃美歌と聖書を収納する箇所が設けられている。

天井部分は 3 本の柱状の梁が出ている。壁面ならびに天井は白い漆喰で調度品は深い茶色のニス塗りの木製という礼拝堂によく見られる簡素な色調で、築 70 年ということもあり歴史を感じさせる落ち着いた空間が広がっている。

### 3) シンボル

現在、シンボルとしては説教壇にかけられている十字架を中心に据えたパッチワークのみである（写真 33）。従来、シンボルは皆無であったが、2 代前のバスカム経済学部宣教師が退職の際、お連れあいの手作りのパッチワークが寄贈されていたとのことで、2006 年度より恒常的に使用している。また、アドベントの季節は、入り口にアドベントリース、ならびに講壇上に聖誕人形を飾ることとし、視覚的にキリスト教を体感する工夫をしている。

また、チャペル開始前には、教会歴ならびに行事歴に相応しいキリスト教音楽を流すことで、聴覚的にもキリスト教の文化を感じ、また、チャペルという特別な時間の雰囲気作りを行っている。



(写真 33)



(写真 34)

#### 4) 調光

40 ワット 2 連の昼光色蛍光灯が各列 3 機配されている。また、東側に古い磨りガラスの窓があり、その一部が黄色の色ガラスとなっているため、晴天時には、ガラスを通しての柔らかい自然光も入ってくることとなる。ただ、蛍光灯ということもあり、全ての部分を均一に明るくしてしまうため、礼拝堂としての神秘性や静寂感、陰影、また、ぬくもりは感じ難いと言わざるをえない。現在、改良の申請を行っているが目途はたっていない（写真 34）。

#### 5) 総括ならびに評価

礼拝堂でもなく教室とも異なる空間という独自の空間をここまで紹介してきた。経済学部チャペル、ならびにチャペルプログラムは経済学部の前宗教主事であられた林忠良関西学院大学名誉教授の尽力によることが大きい。関西学院大学のチャペルプログラムの内容は、原則として各学部の教育理念に則っており、中でも各学部の宗教主事の意向が反映されることが多いため、全学的な統一は難しいと言わざるを得ない。経済学部では、チャペルプログラム運営は一部のキリスト教教職員のみが担ったり、あるいはキリスト教の立場を絶対化し、キリスト教的な考え方を一方的に答えとして提供したりするのではないということを前提として続けられている。そのため、経済学部では全教員がチャペルプログラムの中で自らの実存を学生諸君の前に提示し様々な出会いを提供

することとなっている。

それは、関西学院という学校がキリスト教を絶対唯一とするような学校ではなく、キリスト教主義の学校として一つの権威あるいは確立した狭隘な教義の枠組みでキリスト教を捉えず、キリスト教を媒介にして様々な立場の人々が邂逅する場としてチャペルを捉えるという考え方に基づいている。経済学部チャペルという空間は、教室でもない、礼拝堂でもないという、一種とまどいを与える場として、そこで行われる様々な講話ならびにプログラムをより効果的に、学生諸君に一つの印象や、良い意味での引っかかりを与え続けていると言える。

ただ、照明やシンボルを通しての体感的なキリスト教体験への工夫、また、ユニバーサルデザインの導入といった今後の課題は残されている。

## 【G. 商学部】

### 1) 序

商学部チャペルは現在、商学部本館2階東端に置かれている。この場所は元来、通常の教室として使用されていた（現在でも前側と中央の入口上部には「第10教室」という掲示が残されている）。

この場所にチャペルが置かれたのは1973年のことで、それまでは、商学部本館の西側、現在の第四別館の場所に、独立したチャペルの建物が設置されていた（建築は1939年）。この独立チャペルが取り壊されるに伴い、第10教室がチャペルに改装されたのである。

本館2階東端という場所は、建物の中で一番奥まった場所であり、本館の建物構造に慣れていない人間には見つけにくい。そこで商学部では、チャペル前の階段上がり口に、チャペルの場所を示す標識を立てている（写真35）。また、1階廊下の事務室入口脇に、1週間のチャペルアワーにおけるプログラムを予告する掲示板を従来設置していたが、チャペルアワー以外のキリスト教諸行事についての案内なども併せて出来るよう、掲示板をより大版のものに変更し、従来使用していた掲示板は2階のチャペル横に移設した（写真36）。学校の

チャペルにおいてはこれらの、チャペルそのものの以外の構成要素が大きな意味を持つ。学部（そして大学）がチャペルプログラム（を中心とするキリスト教プログラム全体）を重視していることを、学生に示すものだからである。



(写真 35)



(写真 36)

## 2) 空間構成

上述のように商学部チャペルは、（チャペルを教室兼用に使っている社会学部や総合政策学部、理工学部のような場合とは異なり）チャペル専用室であるとはいえ、元来教室であった場所を改装して作っているため、たとえば神学部チャペルや法学部チャペルのように、最初からチャペルとしての空間であることを意識して建造されたものとは異なり、種々の制約を持っている（この点、経済学部チャペルや文学部チャペルと共通する）。礼拝空間としては天井が低いこと、長椅子の外側と壁との間の空間がほとんどないこと（写真 37）、前方の講壇部分が非常に簡素であること（写真 38）などは、教室改装で作ったチャペルゆえの限界である。

教室としての利用は考えられていないため、机を設置しておらず（文学部チャペルには机が残されている）、その分、収容人数は教室の場合よりも多くなる。商学部チャペルには、チャペル用の長椅子（8 人がけ）が2 本×8 列設



(写真 37)



(写真 38)

置され、通常は 144 名収容であるが、参加者が 100 名を超える場合も少なくなかったため、長椅子の前に補助席用のパイプ椅子 2 列を設置している。縦長の教室を改装したこともあり、いわゆる講堂型の空間をなしているのは、関西学院内のその他のチャペルと同様である<sup>11</sup>。

筆者が宗教主事として赴任した当時は、最前列の椅子と講壇との間が非常に狭く、定期的に行われる聖歌隊やハンドベルクワイア、バロックアンサンブルの巡回音楽チャペルの際に演奏者のための場所が取りづらいという難点があった。そのため、1999 年の本館大改修の際に長椅子を下げ、前方の空間を大きく取るように変更した。チャペルプログラムでは、通常の礼拝形式に則ったものばかりでなく、学生団体による音楽プログラムや、パワーポイント等を使用したプレゼンテーション形式のプログラムも珍しくない。このような種々のプログラム形式に対応できる空間であることが、狭義の「礼拝堂」に留まらないチャペルには求められる。単に受け手としてのみならず、プログラムを提供する側にもなることで（必ずしもキリスト教徒ではない）学生の主体的参加が促されるというのは、教会の礼拝にはない、学校のチャペルならではの特色であろう。

商学部チャペルの講壇は、同じく教室を改装して作られた経済学部チャペル

11 この型は、説教重視の礼拝形式に合致するものだが、その歴史はイエズス会に遡るという。B. レモン『プロテスタントの宗教建築』教文館、2003 年、174 頁以下参照。

や文学部チャペルと比べても質素に作られている。また、講壇と会衆席の間の段差は極めて小さい。これは、筆者の前任宗教主事である故熊谷一綱名誉教授から聞いたところでは、周囲からはもっと段差のある高い講壇にするよう勧められたのだが、意図的にこのような質素で低い講壇にしたとのことである。その意図を詳しく尋ねることはついぞなかったのだが、そこには、チャペルは「礼拝堂」ではないのだから、その作りは簡素であるべきという熊谷教授の考えがあったのだと推測される<sup>12</sup>。

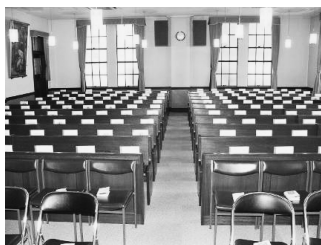
とはいえ、商学部チャペルは、限られた条件の中で、特別な空間であることを意識させる演出をしていることもまた確かである。照明は、教室だった時に設置されていたはずの蛍光灯をやめ、白熱電球による独自の灯りを用いて、温かみのある雰囲気を作っている（写真 39）。前述のように、椅子も礼拝堂らしい長椅子を置いているし、オルガン（現在はアーレン社製を使用。写真 40）には、チャペル後部の壁に遠隔スピーカーを 2 機据え、参加者を包み込むような音響効果が出るよう意図されている（写真 41）。



(写真 39)



(写真 40)



(写真 41)

### 3) シンボル

筆者が赴任した 1997 年当時、商学部チャペルには、「シンボル」と呼べるよ

12 熊谷教授は、「チャペル」と「礼拝」の区別に非常に敏感であった。学校で行われる「チャペル」は「礼拝」ではなく、「キリスト教主義教育」は、学生のキリスト教化を目的とする「キリスト教教育」とは違うということを再三力説しておられたことが思い出される。



うな物は、3枚の絵画(写真42-1、42-2、42-3)を除くと何もなかった。この、極めてプロテスタント的(あるいは改革派的?)とも思える簡素さ<sup>13</sup>も、おそらく熊谷教授の意図によるものであったと考えられる。さらに、礼拝堂とチャペルとは違うという意識<sup>14</sup>に基づいて(と思われる)、十字架も置かれていなかった。



(写真 42-1)



(写真 42-2)



(写真 42-3)

3枚の絵画のうち、写真42-1と42-2は、田中忠雄氏(1903-1995)による作品である(42-1は、ゴルゴタへと歩むイエス、42-2は、「姦淫の女」〔ヨハネ福音書7章53節以下〕)。42-3については詳細未確認。

チャペルに十字架が置かれていないという点については、筆者の同僚であり、筆者と同じく1997年に商学部に赴任したりチャード・スティンソン宣教師・商学部准教授からも度々指摘があった。そこで相談した結果、スティンソン宣教師がアメリカから持ち帰ったバナー2本を飾ることにした<sup>15</sup>。そのうちの1本が十字架をデザインしていたので、これを講壇背後に飾ることで(写真43)、より礼拝堂らしい雰囲気が醸し出されるようになった。他の1本は、ペンテコステをモチーフにしたもので、チャペル側面の壁に飾っている(写真37参照)。正面のバナーは、十字架に鳩をあしらったデザインで、キリスト教

13 レモン、前掲書231-5頁参照。

14 注12を参照。

15 教会の婦人会がボランティアで作成したものだとのことである。

と「平和」の結びつきをイメージさせると共に、“Be filled with the Spirit of God”という言葉が付されている。ここには、チャペルという宗教的空間に身を置くことが平和の創出へとつながっていくという、非キリスト教徒の学生がチャペルプログラムの意味を示すメッセージを（そう意図していたわけではないが、結果として）見て取ることができるようになっている。



(写真 43)

#### 4) 調光

商学部チャペルは、本館2階の角部屋にあるため、後側と（正面を向いて）左側が外に面している。また、元来は中規模教室であったことから、廊下側の入口も3つあり、各扉には窓が付けられている（写真37参照）。そのため非常に明るい部屋である。

後側と左側の窓ガラスはほぼ全てが黄色のステンドグラスになっている（写真39、41参照）。なぜ黄色にしたのか、その経緯は不明だが、一種独特の雰囲気醸し出している。

ただしチャペルは、少し暗い方が非日常的空間としての雰囲気を演出しやすいということもあり、明るさを調節できるほうが良い<sup>16</sup>。そこで窓および扉のところに遮光カーテンを取り付けている。スライドやOHC、パワーポイントなどを利用してのプレゼン型プログラムを行う場合にはこの遮光カーテンを用

---

16 礼拝堂の明るさをめぐるプロテスタントの議論の歴史については、レモン、前掲書206頁以下を参照。

いて、部屋を暗くすることができるようになった。

## 5) 総括・評価

学校のチャペルは、「礼拝堂」としての機能、すなわち宗教的空間として非日常的雰囲気を演じる場所であると同時に、音楽演奏やプレゼンといった種々の「非礼拝型プログラム」にも対応できる機能を持つことが求められる。その兼ね合いがチャペルの特色を生み出す。その観点からすると、ランバス記念礼拝堂や神学部チャペル、法学部チャペルがより「礼拝堂」としての機能に重点を置いているのに対し、商学部チャペルは、宗教的空間としての機能も出来る限り満たしつつ、「非礼拝型プログラム」への対応を考慮した形のチャペルであると言えるように思う。

関西学院においては、チャペルプログラムの運営が各学部の主体と責任に委ねられているため、チャペルとは何かという基本理念についても全学で統一が図られてはおらず、各学部の宗教主事の理解に負うところが大きくなっている。チャペルの空間をどうデザインするかという問題にも、それに応じて、(教室改装のような)歴史的経緯による制限の範囲内ではあるが、宗教主事個人の考えが色濃く反映しているのである。

## 4. 結論

以上、7つのチャペル空間について、定められた観点から考察してきた。キリスト教主義学校であるからといっても、その目的は教育であり、礼拝などの宗教的活動でない以上、そこでの宗教活動の在り方、そして本稿で扱ったチャペル建築・空間にもおのずと制約があることはやむをえないことである。

礼拝目的で設置されたチャペル、また教室から転用されたチャペル、また教室として併用されるチャペルと多様性が現れる理由はここにある。そのような制約のなかで、キリスト教主義学校が、その特有性を失わず、むしろ制約のなかでキリスト教的メッセージを訴求しようとしている実態が明らかになったよ

うに思われる。

他のキリスト教主義学校・キリスト教学校でもその事情は同じであると考え  
る。しかしながら、そのような制約の実際は、各の学校がおかれた環境や教育  
プログラム内の位置づけによって異なるにちがいない。この研究での観点を活  
かしながら、これらを慎重に精査し、それぞれの学校での特徴を明らかにする  
とともに、それらを総合して、たとえば地域による差異を検証することが今後、  
必要となつてこよう。

## 【附論】チャペルに関するアンケート分析

### 1. はじめに

関西学院大学におけるキリスト教主義教育については、これまで関西学院大学・総合教育研究室「カレッジ・コミュニティ調査」「卒業生調査」によって、その意義が調査されてきている。それらの調査項目では、キリスト教主義に関する質問<sup>17</sup>、キリスト教関連科目に関する質問<sup>18</sup>、チャペル〔アワー〕に関する質問<sup>19</sup>が問われている。しかし、その質問内容は限られており、キリスト教主義教育およびチャペルの意義を問うにしても、それがどのような要因に基づくものであるかをその射程に収めていない。そこで、今回の調査では、関西圏におけるキリスト教主義・関係学校の重要性、またチャペル（礼拝堂）のもつ宗教空間としての機能を測定することを目的とした。

### 2. 実施方法

本アンケートは、関西学院大学・上ヶ原キャンパスにある社会学部・経済学部・商学部に所属する学生（912名）を対象に行われた。サンプルとして、キリスト教学（原則一年次履修の教養系科目、ただし再履修の学生もふくむ）に登録した学生を選び、2006年12月19日から2007年1月12日の間において質問紙（参考資料を参照）を配布し、回答をえた<sup>20</sup>。ここでは、調査項目（50

17 「あなたは、関西学院でキリスト教に触れることで、自分自身の考え方や生き方に影響を受けていると思いますか。」（カレッジ・コミュニティ調査2004年11月、2006年11月）、「関西学院でキリスト教に触れたことで、自分自身の考え方や生き方に影響を受けたと思いますか。」（「卒業生調査」2005年7月）

18 「大学時代に学んだことや経験は、現在の生活にどの程度役立っていると思いますか。：キリスト教関連科目、チャペル」（卒業生調査1999年11月、2005年7月）

19 「あなたは、チャペル〔アワー〕にどのくらいの頻度で出席していますか。」（カレッジ・コミュニティ調査2004年11月、2006年11月）、「チャペル〔アワー〕に出席したことは、あなたにとって有意義でしたか。」（同上）。

20 実施日はそれぞれ、社会学部：1月9日、10日、12日の三日間、経済学部：12月19

問) から、15 項目について分析・報告することとする。

### 3. 分析 (1) : キリスト教主義学校に関する項目

日本における教育のなかで、キリスト教に関係の深い学校・機関が重要な役割をはたしてきたことは、ひろく認識されている。(表 1) が示すように、海外出身者(および未記入による不明)をのぞいた学生(862 名)のうち、29.9%(258 名)に及ぶ学生が大学に進学するまでに、何らかの形でキリスト教関係の教育機関にふれていることは、そのような事実を裏付けている。また、これらの学生のうち、650 名(75.4%)が関西学院大学への進学を決めるに際して、キリスト教主義学校であることを意識していたと答えている<sup>21</sup>。

これを地域的分析してみると、(表 2) のようになる。各地域の出身者の割合は、関西学院大学への進学者の傾向から、北海道・東北・東京を含む関東の学生は比率が低いと必ずしも有意な数値とは判断されない。また、中部地方は学校圏から判断して、東海(静岡・愛知・岐阜・三重)とそれ以外の地域にわけて考えた。また近畿地方は、回答者数が多いため、京都・大阪・兵庫の各県とこれ以外の地域という仕方でも検討している<sup>22</sup>。

(表 2) が示すように、各地域でもおおむね 20 数%の学生が、キリスト教関

---

日、20 日の二日間、商学部:1 月 10 日、11 日の二日間である。なお、同時期に神学部でも同様のアンケート調査を行ったが、学生の半数近くが「神学・伝道者コース」でキリスト教信仰を有する学生であるという特殊性から、今回の集計には含めなかった。

21 ただし、キリスト教主義学校であることが進路選択の積極的な要因となったかとの質問については、肯定的回答は 15.4%(はい:36 名、どちらかといえばはい:133 名)にとどまっている。この点は、佐藤などが明らかにしたように、日本における「ミッション・スクール」に対する独特のイメージの問題と関連で慎重に考察すべきだろう。前出の佐藤八寿子(2006 年)を参照。また、稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』(中央公論新社、2007 年)のとくに第 4 章を参照。ちなみに、本人がキリスト教会に所属するものは 14 名(うち 12 名が進路選択の肯定的要因であったと回答)、家族がキリスト教会に属する者は 28 名(うち 27 名が肯定的要因であったと回答)である。

22 また、(表 1) では、関東の欄に、神奈川をのぞいた数値、中部・北陸の欄に、福井を除いた数値を数値として挙げている。したがって、関東全体、中部・北陸全体の数値は、除いた分をそれぞれ加えた数値となる。それ以外の表ではこの限りでない。

## あなたはこれまでキリスト教主義の学校に通ったことがありますか？

	北海道・東北	関東	神奈川	中部・北陸	福井	東海
「はい」	6	2	2	3	3	8
「いいえ」	4	4	1	10	0	25
無記入	0	0	0	0	0	0
小計	10	6	3	13	3	33
	60.0%	33.3%	66.7%	23.1%	100.0%	24.2%

	京都	大阪	兵庫	近畿	中国・四国	九州・沖縄	海外
「はい」	11	80	108	11	24	5	4
「いいえ」	19	150	265	33	89	28	7
無記入	0	3	2	0	0	0	0
小計	30	233	375	44	113	33	11
	36.7%	34.3%	28.8%	25.0%	21.2%	15.2%	36.4%

(表 1)

系の教育機関で学んだことが分かる。その中で、京都・大阪・兵庫<sup>23</sup>の各府県で他地域にくらべ、10 ポイントほど高い数値になっていることは、関西地域でのキリスト教関係学校の重要性を示しているといつて良いだろう。ただし、キリスト教はわが国において都市部を中心に展開した歴史があるので、京都・大阪・神戸という大都市を抱える地域が含まれる故に高率であると考えられることも可能である。今後、東京・横浜をふくむ関東などの有意なデータを収集・比較することによって、より説得的に実証する必要があるのこされている。

以下の(表 3)と(表 4)は、キリスト教会に関する項目である。先にのべたように、(表 3)は相対的に都市部である地域に教会が多く見られるという実態を示している。大阪が 50% にみえない理由は、おそらく「わからない」と

23 兵庫県が京都・大阪ほど高率でない理由としては、兵庫県が旧摂津国を中心とした都市部(阪神間・神戸市)と旧播磨・旧但馬・旧淡路・旧丹波の一部ほかといった広域な地方部から成り立っていることが考えられる。この事情を勘案したとき、28.8%の割合は、決して低いものとは判断できないと考える。今回は、回答のしやすさを配慮して都道府県での回答を得たが、地域分けを細かくした調査によって、京都・大阪もふくめた他の地域でもより実態を反映した結果が得られると推測される。

## 上記の変更版

北海道・東北	関東 (除く神奈川)	中部 (除く福井)	東海	京阪兵	近畿	中国・四国	九州	その他
6	2	3	8	199	11	24	5	6
4	4	10	25	434	33	89	28	8
0	0	0	0	5	0	0	0	2
60.0%	33.3%	23.1%	24.2%	31.4%	25.0%	21.2%	15.2%	42.9%

(表2)

いう回答(62名)が多いためであろう。キリスト教会すべてがいわゆるヨーロッパ様式の会堂としてあるわけではないので、かえって他の建物も密集する地域ではわかりにくいのかかもしれない。

## あなたの地域に教会はありましたか？

	北海道・東北	関東	中部・北陸	東海	京都	大阪
「はい」	7	6	6	17	15	90
「いいえ」	2	1	7	9	9	74
「わからない」	1	2	2	6	6	62
無記入	0	0	1	1	0	7
小計	10	9	16	33	30	233
	70.0%	66.7%	37.5%	51.5%	50.0%	38.6%

	兵庫	近畿	中国・四国	九州・沖縄	海外	その他
「はい」	189	21	52	15	8	2
「いいえ」	99	8	32	10	1	2
「わからない」	73	14	27	7	2	1
無記入	14	1	2	1	0	0
小計	375	44	113	33	11	5
	50.4%	47.7%	46.0%	45.5%	72.7%	40.0%

(表3)

(表3)によれば、回答者はそれぞれの居住地にキリスト教会があることを認識しており、必ずしもその存在に無関心なわけでないことが理解される。これを前提として(表4)を検討することになろう。関西学院大学が立地する地



域である阪神間<sup>24</sup>に、教会が多く見られるかとの質問に、中部・北陸および東海出身の回答者は、30% が肯定的に回答している。大阪・兵庫の出身者は、自分の居住地域にキリスト教会が多いかとの質問と重複するために、肯定的回答は10% 台であるが、これはもともと教会が多いと回答した地域であるので、やや数値が下がることは当然であると判断される。「普通」との回答をくわえた数値から判断する必要があると思われる。次に検討するキリスト教関係学校にくらべると、教会の有無は回答者が判断しにくいこともあって、阪神地域に教会が多いとの印象を回答者がもっているかについては、傾向としてそれが見られるものの、これらの数値から必ずしも十分に示されたとは言えない。

では、キリスト教関係学校についてどのように認知されているのであろうか。(表5)は、各地域におけるキリスト教主義学校の認知度をまとめたものとなる。(表1)の示す結果と同様に、各地域にキリスト教関係学校は広く認知されていることがわかる。

これと比較しながら、(表6)を見てみよう。各出身地域とくらべて阪神間にキリスト教関係学校が多いと判断するかとの質問である。この表は、上記(表4)と同じ事情にあるので、肯定的回答(はい、どちらかといえばはい)と「普通」であるとの回答をあわせて見ることが妥当である。肯定的回答(「普通」を含む)をみれば、「わからない」という回答が少なくないにもかかわらず、(大阪・九州・沖縄を除いて)25% 以上となっている。とくに中国・四国地域では40.7% にのぼる。

この分析の冒頭で確認したように回答者は、進学先が「キリスト教主義学校」であることを情報として十分認識していた。しかし、同時に、これを重要な要素とは回答者は考えていなかった(15.4% が肯定的回答)。つまり回答者は、

---

24 「阪神間」との規定は、行政区分としては「尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、川西市、宝塚市、川辺郡猪名川町、三田市」の7市1町であるが、「阪神間〇〇」という言葉などが示すように、広く「大阪から神戸にひろがる地域」をも表わす場合がある。ここでは、回答者がこれらを厳密に区別して回答できるとは考えなかったので、このいずれも含んだ意味で用いている。本論の目的から、関西圏におけるキリスト教主義学校の意味を考察するために、その厳密な区別は必ずしも必要ないと考えたためである。

## 阪神間に教会は多いと思いますか？

	北海道・東北	関東	中部・北陸	東海	京都	大阪
肯定的回答	1	3	5	12	5	24
「ふつう」	0	0	0	3	1	26
否定的回答	8	6	0	1	0	4
「わからない」	1	0	10	17	24	171
無記入	0	0	1	1	0	8
小計	10	9	16	34	30	233
肯定的回答	10.0%	33.3%	31.3%	35.3%	16.7%	10.3%
「ふつう」を含む	10.0%	33.3%	31.3%	44.1%	20.0%	21.5%

	兵庫	近畿	中国・四国	九州・沖縄	海外	その他
肯定的回答	38	7	18	3	4	0
「ふつう」	70	3	13	3	2	1
否定的回答	22	1	2	0	0	1
「わからない」	230	33	78	25	5	3
無記入	15	0	2	2	0	0
小計	375	44	113	33	11	5
肯定的回答	10.1%	15.9%	15.9%	9.1%	36.4%	0.0%
「ふつう」を含む	28.8%	22.7%	27.4%	18.2%	54.5%	20.0%

(表 4)

## あなたの地域にキリスト教関係学校はありましたか？

	北海道・東北	関東	中部・北陸	東海	京都	大阪
「はい」	5	5	7	21	13	86
「いいえ」	3	3	6	9	9	56
「わからない」	2	1	2	3	8	82
無記入	0	0	1	1	0	9
小計	10	9	16	34	30	233
	50.0%	55.6%	43.8%	61.8%	43.3%	36.9%

	兵庫	近畿	中国・四国	九州・沖縄	海外	その他
「はい」	132	21	44	14	5	0
「いいえ」	122	9	38	6	4	3
「わからない」	108	13	29	12	2	2
無記入	13	1	2	1	0	0
小計	375	44	113	33	11	5
	35.2%	47.7%	38.9%	42.4%	45.5%	0.0%

(表 5)

## 阪神間にキリスト教主義学校は多いと思いますか？

	北海道・東北	関東	中部・北陸	東海	京都	大阪
肯定的回答	1	2	3	7	6	25
「ふつう」	1	0	1	4	2	24
否定的回答	0	0	0	1	0	8
「わからない」	8	7	11	22	22	169
無記入	0	0	1	0	0	7
小計	10	9	16	34	30	233
肯定的回答	10.0%	22.2%	18.8%	20.6%	20.0%	10.7%
「ふつう」を含む	20.0%	22.2%	25.0%	32.4%	26.7%	21.0%

	兵庫	近畿	中国・四国	九州・沖縄	海外	その他
肯定的回答	59	7	52	2	2	1
「ふつう」	63	3	16	3	2	1
否定的回答	15	1	2	1	1	0
「わからない」	224	33	78	25	6	3
無記入	14	0	19	2	0	0
小計	375	44	167	33	11	5
肯定的回答	15.7%	15.9%	31.1%	6.1%	18.2%	20.0%
「ふつう」を含む	32.5%	22.7%	40.7%	15.2%	36.4%	40.0%

(表 6)

一般に学校の特性を判断する際、キリスト教主義であるかどうかについての関心は希薄であると言える。このような回答者が、阪神地域にキリスト教関係学校が多いとの印象をもつものが、25% をこえて見られることは、キリスト教関係学校がこの地域に特徴的なものとして認知される傾向にあることを示していると判断すべきであると考ええる。

#### 4. 分析 (2) : キャンパスおよびチャペルに関する項目

以下の、質問項目はキリスト教主義学校である関西学院大学で学ぶ学生がどのようにキリスト教主義を体感しているかを調査する意図をもって設定されている。

関西学院大学では、すべての学生は必修科目として「キリスト教学」を履修

することが義務づけられている。このようなカリキュラムの点から当然のこと以外に、日常のキャンパスライフのどのような点で関西学院大学をキリスト教的と考えているかが、まず問題となる。「キャンパスがキリスト教的であるか」との間に、38.6%の回答者が肯定的に答えている。そしてその理由として、最上位に「建物」「チャペル」が挙げられている。建物が具体的に何を指すか記されていないので推測するしかないが、ランバス記念礼拝堂のようなヨーロッパの会堂建築にならった建物がキャンパス内にあること、スパニッシュ・ミッション・スタイルと言われる建築様式を指していると思われる。また時計台があることを具体的に答えた回答者も少なくなかった。これは、この二つの回答につづく「キャンパス全体」「雰囲気」という言葉もふくめて、関西学院大学の建築様式が日本人にとって、いわゆる「ヨーロッパ」を意識させるものであり、それがまた同時に「キリスト教的」との印象を与えていると推測される。日本におけるキリスト教受容が、しばしば「ヨーロッパ文化」の受容として進んだことを考えると興味深い。

季節毎にキリスト教会の暦にしたがって、復活祭や降誕祭が学内でも祝われる。また、春と秋にそれぞれ一週間の「大学キリスト教週間」がもたれ、各種のキリスト教プログラムが実施されている。しかしながら、そのようなキリスト教行事を回答した者は15名にとどまった。人間に対する環境や風景のもつ働きかける力の重要性をここにみることができるだろう。

このようなキャンパスにおけるキリスト教的環境を構成する重要な要素であるチャペル（礼拝堂）について以下、検討することにして。各学部チャペルについて考察にみられるように、関西学院大学における礼拝堂は、たんにチャペルアワーと呼ばれる時間のためにはじめから用意されたわけではなく、さまざまな事情で、教室から転用されたり、教室と共用されたりする空間でもある。これは他のキリスト教主義学校でも概ね同様である。

「チャペルがキリスト教的であるか」との問に対して、68.5%が肯定的に回答している。その理由として、「雰囲気」「照明」が挙げられている。「雰囲気」という表現には、この空間が他の空間と区別されていることがその重要な点と

キャンパスがキリスト教的であると思いますか

「はい」	352	〔理由〕	建物	83
「いいえ」	117		チャペル	56
「わからない」	391		キャンパス	41
無記入	52		雰囲気	27
合計	912		西欧風	19
「はい」の比率	38.6%		キリ行事	15
			その他	58
			合計	299

(表 7)

してあげられていた。それは、しばしば「神聖」という形容が用いられる。また「静かである」、「落ち着いた様子」という言い方でも表現されている。「照明」という表現は、この空間が教室などの明るい空間にくらべて調光されていること、色つきガラスなどで、白色光でない色彩のある空間に整えられていることが含まれている。いずれもこの空間の全体的な空気（アトモスフィア）の特徴が、回答者にキリスト教的との印象を与えていることが分かる。このような空間を設計する際に、どの点に配慮すべきか教えられるところが多い結果である。また、チャペルでは、礼拝音楽が奏でられ、各種の演奏会も行われる。また、チャペルアワーでは讃美歌が歌われるため、「音楽」をその理由としてあげる者も少なくなかった。

それに対して、十字架をふくめて、さまざまなキリスト教的装飾品を第一にあげる回答者は少なかったことは興味深い。これらの装飾品・礼拝用品は、キリスト教的にそれぞれ定められた意味や役割が付与されているが、これらはキリスト教的な文化背景を理解しなければその重要性を十分にくみ取ることができないからであろう。チャペルにとって、これらは不可欠であるけれども、それらが据えられたからと言って、そのままそれがキリスト教であるとは一般には受けとめられ得ないと判断されなければならない。

ただし、それは当然、不要であるとか、意味がないということにはならない。学内における聖書からの言葉（聖句）およびキリスト教を主題とした絵画につ

チャペルがキリスト教的だと思いますか

「はい」	625	〔理由〕	雰囲気	123
「いいえ」	225		照明	68
「わからない」	1		音楽	54
無記入	61		装飾品	26
合計	912		礼拝堂	10
「はい」の比率	68.5%		その他	95
			合計	376

(表 8)

いては、全体の約 25% が学内に配されていることを十分に認識しているからである（表 9、表 10）。いっぽう各種のキリスト教的シンボルは、全体の 10% 以下にしか認知されていない（表 11）。聖書の言葉は具体的なメッセージであり、キリスト教的絵画は聖書に登場する人物や情景が描かれているために、直覚的にそれとわかるのに対して、象徴はそれが意味している内容が一見したところ判然としないところがあるためであると考えられる。

聖句であれ、キリスト教絵画であれ、それらは空間が醸し出す《アトモスフィア》と比べると、はるかに内容豊かな明確なメッセージを発信するという特性がある。この点は、キリスト教的なシンボルも同断である。空間のアトモスフィアは、その空間を体験する者にたとえば「神聖」な感覚を体験させる。しかし、それはまさに言葉にしがたい仕方では体験されるものであり、それが何であったか意識化されにくいともいえる。他方、聖句・絵画・シンボルは、それらを通して、言語化可能なメッセージを伝えるものとして機能することができる。この意味で、空間のアトモスフィアと聖句などのチャペルを構成する諸要素はたがいに補いあって機能するものでなければならないと言えるだろう。その際、チャペルという場・機会をもちいて、キリスト教活動を行う宗教主事・宣教師などの働きがこれらを媒介する働きとして重要となってくるにちがいない。聖書の言葉がつたえるメッセージ、キリスト教的絵画が示す世界観、象徴が指さす事柄を伝え、このチャペルという空間の意味を深く理解するように助けうながすのは、キリスト教活動担当者の役目であるからである<sup>25</sup>。

学内の聖句

「はい」	251
「いいえ」	610
無記入	51
合計	912

(表 9)

学内のキリスト教絵画

「はい」	224
「いいえ」	638
無記入	50
合計	912

(表 10)

学内の象徴

「はい」	79
「いいえ」	781
無記入	52
合計	912

(表 11)

## 5. 総括

今回の調査は、関西学院大学に学ぶ学生を対象に、関西圏におけるキリスト教主義教育機関の意義およびチャペルがもつ宗教空間としての機能を測定することを目的として行われた。

関西圏におけるキリスト教関係教育機関の重要性については、他地域と比べて特徴的なものであるとの傾向がみてとれるものの、東日本からの回答者が十分でないので、十分に立証されているとはいいがたい。今後、調査対象の選び方を精査して検討を試みる必要があるであろう。また、関西圏域内においても、京阪神の都市部と他の地方部との偏倚が無視できないように判断されるので、この点の考慮も必要である。

また、チャペル空間の機能については、従来、期待していた以上に、空間が訴求する宗教的メッセージの強度が高かったことが注目される。宗教の専門家は、聖書の言葉や絵画、もしくはシンボルといった直截的に宗教的メッセージをあたえる対象により、これを表現することに力を注ぎがちである。しかしながら、このような要素や部分的なものよりも、アトモスフィアのような全体的なものが重要であることを調査結果は示している。この結果は、キリスト教主義学校が、みずからをキリスト教主義学校として整えてゆく際に、どのような点に注意すべきかを教えてくれている。

---

25 その意味で、チャペルを《構成する要素》として、宗教主事・宣教師の存在の重要性を指摘しなければならない。

\*\*\*\*\*

### 【参考資料】キリスト教関係学校に関する調査（本論で言及した項目のみを挙げる）

本質問票は、関西におけるキリスト教関係学校に関する学術調査のためのものです。本来の目的以外に、調査結果は利用することはありませんので、できるだけ率直に回答してください。質問中、キリスト教関係学校とは、キリスト教主義〔プロテスタント諸教会〕やカトリックのキリスト教的理念にもとづいて、教育などの目的のために、設立された機関とします。

- 問 1. あなたは何学部所属の学生ですか。 (\_\_\_\_学部)
- 問 4. あなたの出身地はどこですか。 (\_\_\_\_都道府県)
- 問 5. あなたは、これまでにキリスト教関係学校（保育所幼稚園を含む）にいったことがありますか。 (はい・いいえ)

\*\*\*\*\*

- 問 15. 関西学院大学への進学を決めるに当たっては、キリスト教関係学校であることを知っていた、または意識しましたか。 (はい・いいえ)
- 問 16. 関西学院大学がキリスト教主義であることは、進学を決めるために、肯定的な条件となりましたか。  
(はい・どちらかといえばはい・わからない・どちらかといえばいいえ・いいえ)

\*\*\*\*\*

- 問 32. あなたの育った地域に、キリスト教会があったことを覚えていますか。  
(はい・いいえ・わからない)
- 問 33. 阪神間（関西学院がある地域）にあるキリスト教会はどうですか。  
(かなり多い・多い・普通・少ない・かなり少ない・わからない)



問 34. あなたの育った地域に、キリスト教関係学校があったことを覚えていますか。

(はい・いいえ・わからない)

問 35. 阪神間（関西学院がある地域）にあるキリスト関係学校はどうか。

(かなり多い・多い・普通・少ない・かなり少ない・わからない)

\*\*\*\*\*

問 44. 関西学院大学のキャンパスは、キリスト教的だと思いますか。

(はい〔どこが: 〕・いいえ・わからない)

問 45. チャペルは他の教室とは異なった特徴的な空間だと思いますか。(はい・いいえ)

問 46. その理由を簡単に記してください。( )

問 47. チャペルや学内の建物に聖書からの言葉を掲げてあることを知っていますか。

(はい〔チャペルに・学内に〕・いいえ)

問 48. チャペルや学内にキリスト教絵画が掲げてあることを知っていますか。

(はい〔場所: 〕・いいえ)

問 49. チャペルや学内に十字架以外のキリスト教的シンボル・意匠があることを知っていますか。  
(はい〔 〕・いいえ)

\*\*\*\*\*

# 【執筆の主たる分担】

本論の 1・2・4・附論: 平林\*、3-A・B: 中道\*、3-C: Rusterholz、3-D: 打樋\*、3-E: Hermansen、3-F: 舟木\*、3-G: 辻\*

(\*は関西文化研究センター研究プロジェクト分担者、他は協力者。)

(本研究は、武庫川女子大学・関西文化研究センター研究プロジェクト「関西圏の人間文化についての総合的研究—文化形成のモチベーション」の助成による成果である。)